〔日総歯誌　第17巻　第1号：26～32頁，2025，10月〕

原 著

臨床研修歯科医の外国人患者治療状況および外国語学習に関する意識についての調査

山田和彦[1)]　鷹取　諄[1)]　山本　繁[1)]
畠山純子[1)]　吉田瑞姫[1)]　柳　絢子[1)]
石井綾子[2)]　都築　尊[3)]　樋口勝規[4)]
米田雅裕[1)]

抄録：グローバル化の進展に伴い，教育方法および教育環境の国際化が求められている。そこで，福岡歯科大学では卒前の外国語教育の改善に努めている。また近年，日本語を母国語としない患者の来院が増加しており，診療においても英語を使用する機会が増加してくると考える。これらのことから，卒後においても継続的な外国語学習が重要だと考える。

今回われわれは，研修プログラム改善に向けての基礎データ収集のため臨床研修歯科医（以下研修医）を対象として，どのくらい外国人患者の治療をしているか，またどの程度外国語学習を行っているかについて無記名のアンケート調査を行った。

多くの研修医が何らかの形で外国人患者に関わっており，研修医自身は今後より多くの外国人患者と接する機会が増えると予想していたが，実際に外国語を勉強している研修医は多くはなかった。一方，多くの研修医は国際学会参加や短期研修や観光のため，海外渡航を希望していた。外国語学習に関しては，研修医は海外研修に参加したり，英会話のクラスに参加したり，英語論文の書き方指導を受けたりしたいと考えていた。

今回のアンケート結果により，研修医の外国人患者治療経験，外国語学習への姿勢，海外渡航の希望などを把握することができた。これらのデータを臨床研修プログラムの改善に生かし，研修医が卒前から卒後にかけて継続的に外国語を学ぶ手助けにすることが必要だと考えられる。

キーワード：アンケート調査　研修歯科医　外国人患者治療　外国語学習の意識

緒　言

文部科学省が発表した，大学のグローバル化に関する閣議決定・提言等では，グローバル化に対応した教育環境づくりを進めるために，大学は教育内容と教育環境の国際化を進め，世界で活躍できるグローバルリーダーを育成することが必要であるとしている[1,2)]。

広島大学歯学部歯学科では，日英両言語教育システムを採用し大きな成果を上げている[3)]。また，この国際教育により海外留学に対する意欲が高まったことが報告されている[4)]。

福岡歯科大学（以下本学）でも学生教育の国際化のために，さまざまな取り組みを行っている。外国人講師によるPractical English 講義の他，医学英語を教育するGlobal Medical Englishの授業もある。さらに最近，臨床推論の能力を高め外国人患者の治療や，国家試験の英語問題にも対応できるようにGlobal Medical English Ⅱも開講した[5)]。

近年，外国語の習得や国際感覚の育成の重要性が認識され始めたことから，教育の一環として海外研修を取り入れる大学が増加している[6)]。本学でも欧米やアジアの大学に学生を派遣するプログラムを実施しており，優れた教育効果を発揮している[7)]。一方，卒業後も外国人患者の治療や国際学会での発表などで英語が必要になるため，継続的な外国語学習が重要である。しかし，学生時代に外国語を学習していても，卒業と同時に勉強しなくなるケースも少なくないと思われる。卒前から生涯へのシームレスな外国語学習習慣を身に着けるためには，臨床研修歯科医（以下研修医）の意識改革が必要である。

我々は以前，本学の学生や研修医の国際交流についての意識調査を行ったが[7,8)]，研修医の外国人患者治

1) 福岡歯科大学総合歯科学講座総合歯科学分野（主任：米田雅裕教授）
2) 福岡医療短期大学歯科衛生士学科
3) 福岡歯科大学咬合修復学講座有床義歯学分野
4) 福岡歯科大学医科歯科総合病院客員教授
1) Section of General Dentistry, Department of General Dentistry（Chief: Prof. Masahiro Yoneda）2-15-1, Tamura, Sera-ku, Fukuoka-shi, Fukuoka 814-0193, Japan.
2) Department of Dental Hygiene, Fukuoka College of Health Sciences
3) Section of Removable Prosthodontics, Department of Oral Rehabilitation
4) Visiting Professor, Fukuoka Dental College

療状況や外国語学習状況は不明である。そこで今回，われわれは研修医の外国人患者治療状況や外国語学習状況を把握し，さらに将来の研修プログラム改訂の参考にするため，無記名による質問票調査を行った。

対象および方法

対象は令和 6 年度福岡歯科大学医科歯科総合病院研修医 45 名（男性 24 名，女性 21 名）とし，google form による無記名アンケートを提示し，回答を依頼した。アンケート内容を別に示す（表 1）。調査結果の分析・公表に同意が得られ，記載漏れのない回答について分析を行った。

本研究は福岡学園倫理審査委員会の許可を得て実施した（許可番号：No. 688）。

結　果

対象の研修医全員（45 名）から，アンケートに対する回答およびアンケート結果の学会発表に対する同意が得られた（有効回答率 100％）。最初に外国人患者の治療経験や今後の外国人患者数の予想について質問した。学生時代から現在までに外国人患者の治療を見学したことがある研修医は 38 名で，実際に治療を経験した研修医は 8 名であった。多くの研修医が何らかの形で外国人患者に関わっていたが，外国人の患者を経験していない研修医も 10 名いた（図 1）。今後の外国人患者の予想を尋ねたところ，19 名の研修医が今後，外国人患者と接触する機会がかなり増えると考え，24 名の研修医が少し増えると予想していた（図 2）。

次に研修医の外国語学習状況について尋ねた。現在外国語の勉強をしていないと回答した研修医の数は 33 名で，外国語を学習している研修医は 12 名であった。一方，今後外国語を学習する予定の者は 24 名で，教科書だけでなく映画，外国語論文，テレビ・ラジオなど，より実践的な方法を考えていた（図 3）。

これまでに受けた外国語検定試験は実用英語技能検定（英検）が最も多く（40 名），Test of English for International Communication（TOEIC），Test of English as a Foreign Language（TOEFL）がこれに続いた（図 4）。一方，今後受けたい検定試験は TOEIC が最多で TOEFL がこれに続いた（図 4）。試験を受けたくないと回答した研修医は 21 名であった。

海外旅行の経験および希望について質問を行った。37 名の研修医が海外渡航を経験していた（図 5）。その形態としては観光が最も多かったが，1 年未満の短期海外研修，1 年以上の外国留学，海外居住を経験した研修医もいた（図 6）。今後の海外渡航希望について尋ねたところ，38 名の研修医が海外渡航をしたいと思っていた（図 7）。そこで，海外渡航を希望する研修医と希望しない研修医それぞれに質問を行った。海外渡航を希望する場合，希望する渡航の形態としては個人旅行が最も多かったが，国際学会や短期海外研修といった業務に関連した渡航を希望する研修医もいた（図 8）。また，14 名の研修医は 1 年以上の留学を希望していた。海外渡航を希望する理由としては，観光地訪問や食事を楽しむことが最も多く，外国語の勉強のため，現地人との交流という回答がこれに続いた（図 9）。渡航を希望しない研修医にその理由を尋ねたところ，語学力の不安をあげる研修医が最も多かったが，治安に対する不安があるといった回答や，海外渡航に興味がないと回答した研修医もいた（図 10）。

最後に外国語学習に関する臨床研修プログラムについて質問した。希望する研修プログラムは海外研修が最も多く，外国語会話の授業，英語論文の読み方指導と続いた（図 11）。国際学会に参加することで外国語を勉強したいという研修医もいた。また，本学では以前，研修プログラムに海外研修を取り入れており，米国人家庭でのホームステイや大学の歯学部や歯科診療所での研修を行っていたが，今後再開された場合，是非参加したいという研修医が 23 名，少し参加したいという研修医が 10 名いた（図 12）。

考　察

本学研修医の多くが，学生時代および臨床研修期間中に見学，医療面接，治療など，何らかの形で外国人患者に関わっていたことが明らかになった。地方の大学としては予想以上に外国人患者に関わっていたが，このことは 福岡市がアジアの交流拠点都市を目指しており，アジア諸国からの移住者が多いことが要因と思われる。また，外国人患者は文化や言葉の不安から受療行動を抑制している可能性があり[9]，外国人を世話している団体が大学病院を紹介していることも，外国人患者が一般開業医への受診を控えることとなった一因として考えられる。多くの研修医が今後外国人患者の増加を予測した背景には，近年の国際化の進展や，インバウンド観光客の増加に関する報道など，メディアの影響があると考えられる。ただし，今回の質問は学生時代から研修期間中までを対象としたため，調査対象期間が広範であり，さらに複数回答であったため，どの時期に，どの程度深く外国人患者に関わったかを明らかにすることができなかった。

現在，外国語の勉強をしていない研修医が 33 名（全体の 73％）おり，外国語学習を行っている研修医は多くなかった。東京医科歯科大学の調査では 6 年生の英語力低下が認められており[10]，国家試験勉強をきっかけに，外国語学習の習慣が減少している可能性があると思われる。この理由として，学生時代には進級に関わるため外国語を学習していたが，卒業後にはその必要性を感じなくなり，外国学習を中断している

表 1　アンケート内容

研修医の外国語学習に関するアンケート

研修医の外国人患者治療状況，外国語学習状況の確認と来年度以降のプログラム作成の参考のために無記名アンケートを実施します．ご協力お願いします．
（1～4ページまであります．）

Ⅰ．プログラム等について
あてはまるものひとつに○をつけてください．
プログラム：［ 1 ・ 2 ］
性別　　：［男性 ・ 女性］

Ⅱ．外国人の診療について
1．学生時代，研修医時代に外国人の患者さんの治療，見学や医療面接をしたことがありますか？あてはまるものすべてに○をつけてください．
（　）治療を担当した．
（　）医療面接を行った．
（　）見学した．
（　）その他（　　）
（　）外国人の患者さんはいなかった．

2．今後，外国人の患者さんと接触する機会が増えると思いますか？
あてはまるものひとつに○をつけてください．
（　）かなり増える．
（　）少し増える．
（　）変わらない．
（　）少し減る．
（　）かなり減る．

Ⅲ．外国語学習について
3．現在，外国語の勉強をしていますか？あてはまるものすべてに○をつけてください．
（　）テレビ・ラジオ
（　）外国語学校
（　）外国語論文
（　）教科書で学習
（　）サークル活動
（　）外国映画
（　）その他（　　）
（　）特に勉強していない　　**裏もあります**

4．今後，外国語勉強の予定がありますか？あてはまるものすべてに○をつけてください．
（　）テレビ・ラジオ
（　）外国語学校
（　）外国語論文
（　）教科書で学習
（　）サークル活動
（　）外国映画
（　）その他（　　）
（　）特に予定していない

5．これまでに外国語の検定試験を受けたことがありますか？
あてはまるものすべてに○をつけてください．
（　）英　検
（　）TOEIC
（　）TOEFL
（　）その他（　　）
（　）受けたことがない

6．今後，外国語の検定試験を受けたいと思いますか？
あてはまるものすべてに○をつけてください．
（　）英　検
（　）TOEIC
（　）TOEFL
（　）その他（　　）
（　）受けたくない

Ⅲ．国際交流について
7．外国に行ったことがありますか？
（　）ない
（　）ある

7－1．外国に行ったことがある方にお聞きします．
どのような形の渡航ですか．あてはまるものすべてに○をつけてください．
（　）観　光
（　）国際学会
（　）短期研修（1年未満）
（　）外国留学（1年以上）
（　）海外居住
（　）その他　　**裏もあります**

8．今後，海外に行きたいですか？
（　）行きたい　　（　）行きたくない

8－1．行きたいと回答された方にお聞きします．
海外に行く目的は何ですか．あてはまるものすべてに○をつけてください．
（　）観光地に行きたい
（　）食事を楽しみたい
（　）外国語の勉強をしたい
（　）現地の人と交流したい
（　）研究，臨床の情報を収集したい
（　）日本を外から見たい
（　）その他（　　）

8－2．行きたいと回答された方にお聞きします．将来海外に行くならどのような形を希望しますか？あてはまるものすべてに○をつけてください．
（　）パック旅行
（　）個人旅行
（　）国際学会
（　）短期海外研修（1年未満）
（　）外国留学（1年以上）
（　）外国居住
（　）その他（　　）

8－3．行きたくないと回答された方にお聞きします．
行きたくない理由は何ですか．あてはまるものすべてに○をつけてください．
（　）興味がない
（　）語学力が不安
（　）経済的問題
（　）治安が心配
（　）健康に対する不安
（　）時間がない
（　）その他（　　）

9．研修プログラムに次のような外国語学習があるといいと思いますか？
（　）外国語会話の授業
（　）外国語論文の読み方指導
（　）外国語試験の実施
（　）ビデオ等の視聴覚教材視聴
（　）国際学会参加
（　）海外研修
（　）その他（　　）　　**裏もあります**

10．福岡歯科大学では以前，臨床研修歯科医海外研修が行われていました．（3月，希望者のみアメリカ西海岸1週間ホームステイ，大学，開業歯科医院見学等）
もしも，このようなプログラムがあれば参加したいですか．
あてはまるものひとつに○をつけてください．
（　）是非，参加したい．
（　）少し参加したい．
（　）どちらとも言えない．
（　）あまり参加したくない．
（　）まったく参加したくない．

ご協力ありがとうございました．質問は以上です．
このアンケート結果は無記名の状態で集計して，研修内容改善のために学会発表することがあります．公表に同意されますか．
（　　）同意する　　（　　）同意しない

調査責任者：米田雅裕，畠山純子，山田和彦

可能性がある。また，現在の学習方法として教科書を使用しているとの回答が最も多かったことから，教科書以外で外国語に触れる機会が限られている可能性が示唆される。現在，外国語の勉強をしていない研修医のうち，今後外国語を学習したいと考えている研修医は24名であり，これは現在実際に学習している研修医（12名）よりも多かった。この差が生じた要因としては，学習意欲はあるものの，学習時間の確保などが一因となっている可能性が考えられる。現在および今後の外国語学習内容に関する回答から，教科書より

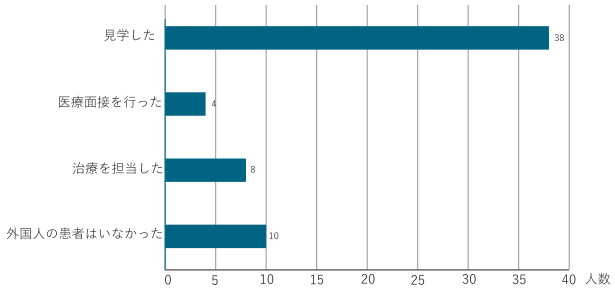

図 1　学生時代および臨床研修中の外国人患者治療経験（複数回答）

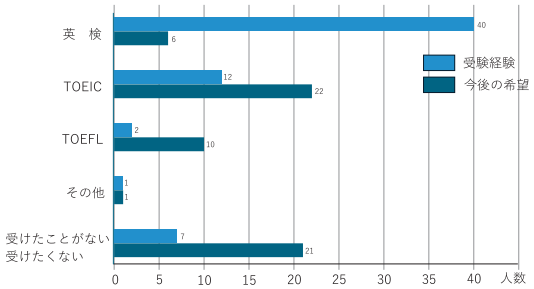

図 4　外国語検定試験受験経験および今後の受験希望（複数回答）

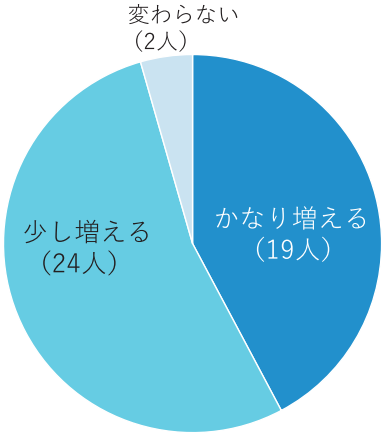

図 2　今後の外国人患者数の予想

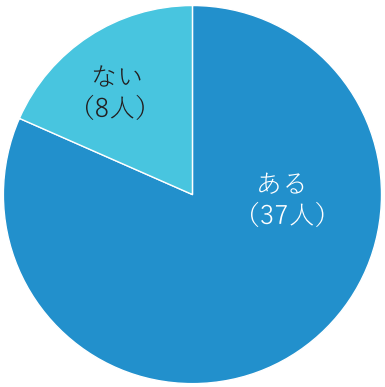

図 5　海外渡航経験の有無

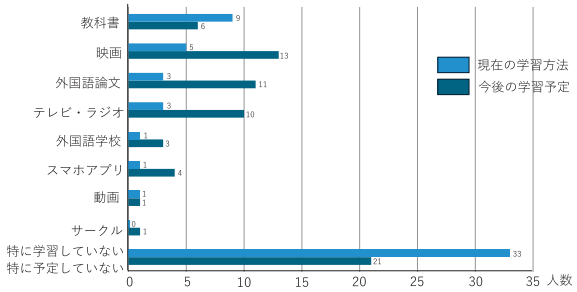

図 3　現在および今後の外国語学習の内容（複数回答）

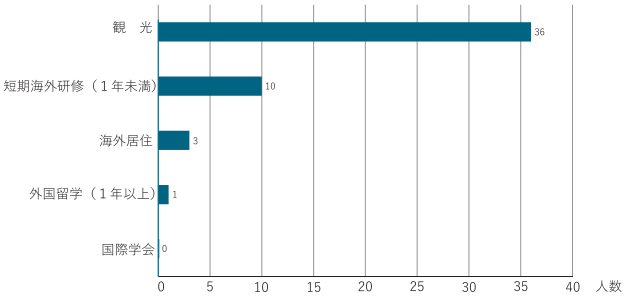

図 6　経験した海外渡航の形態（複数回答）

も映画や論文を重視する傾向が見られたのは，視覚・聴覚的な教材の方が理解しやすいと感じている可能性が考えられる。最近では，AI を使用した語学学習アプリなど，様々な外国語を学べるアプリが開発されていることから，スマートホンのアプリなど新しい媒体を用いて学習しようとしていることも興味深い点である。これまでに受けた外国語検定試験は英検がもっとも多く，過去の研究と同様の傾向がみられた[10]。高校時代には英語力判定の手段として英検を受験させることが多いことが一因と思われる。今後受けたい検定試験が TOEIC や TOEFL の方が英検よりも多かった要因としては，就職や留学で役立つという認識が一因として考えられるが，英検のようにスコアで評価される形式が，生涯学習には適していると捉えられている可能性もある[11]。

海外渡航について質問したところ，多くの研修医に海外渡航の経験があった。観光旅行が多かったが，海外研修や海外居住の経験がある研修医もいた。また，多くの研修医が今後，海外に行きたいと回答した。近年，若者が海外渡航を希望しない，いわゆる内向き志向[12]が指摘されているが，今回調査した研修医は比較的海外への興味を有していることが明らかになった。希望の形態としては個人旅行が最も多かったが，国際学会や短期海外研修といった，業務に関連した渡

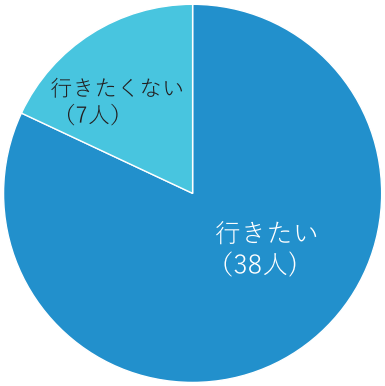

図 7　今後の海外渡航希望の有無

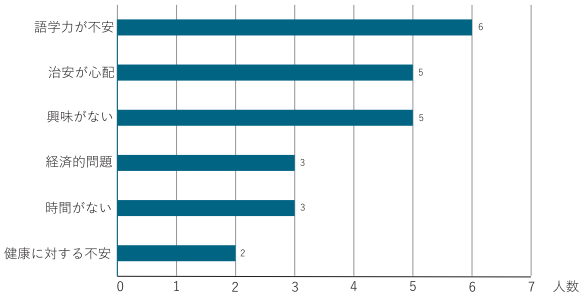

図 10　海外渡航したくない理由（渡航を希望しないと回答した者対象，複数回答）

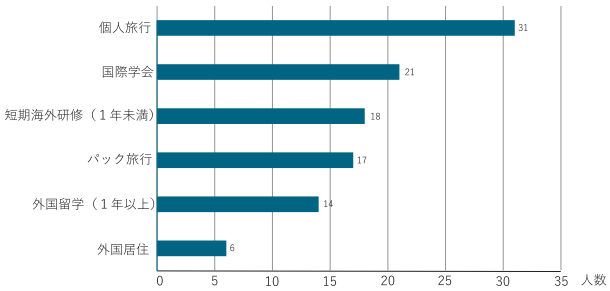

図 8　今後の海外渡航の希望形態（渡航を希望すると回答した者対象，複数回答）

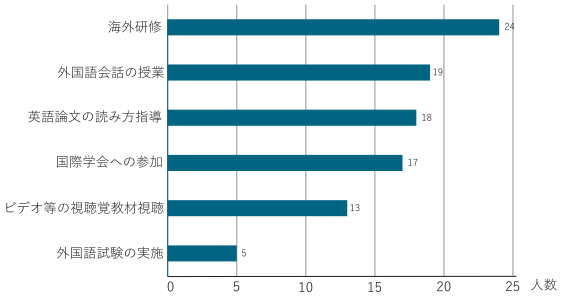

図 11　臨床研修プログラムで希望する外国語学習の内容（複数回答）

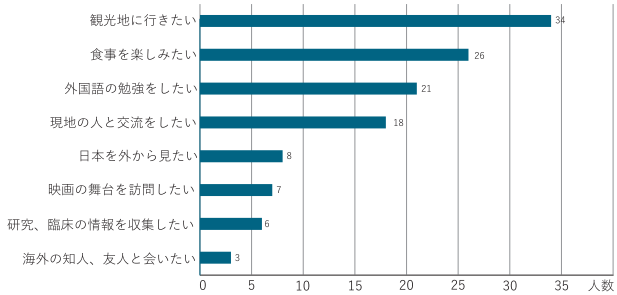

図 9　海外渡航の目的（渡航を希望すると回答した者対象，複数回答）

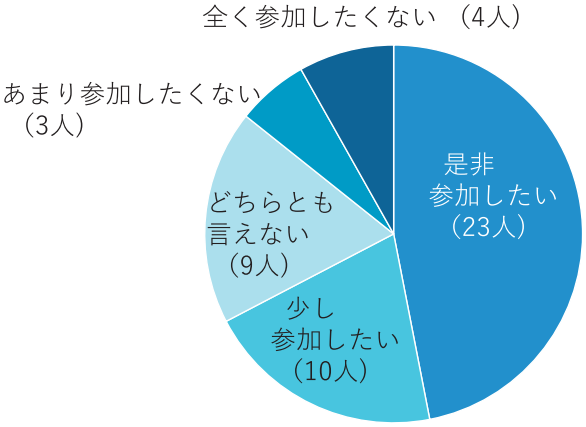

図 12　海外研修プログラム参加希望状況

航を希望する研修医も多かった。また，留学や海外居住など長期の渡航を希望する研修医もいた。本学の研修医は研修終了後，大学院生，医員，研究生等で大学に残るケースが多く，将来の進路をイメージして回答した可能性がある。海外渡航を希望する理由としては，観光地訪問や食事を楽しむという回答が多かったが，英語の勉強のためや現地の人と交流したいという回答があり，観光以外の成果を期待していると思われる。渡航を希望しない理由としては，語学力の不安をあげる研修医が多かった。やはり，海外に渡航する場合，ある程度の語学力が必要であり，多くの日本人が言葉の壁を不安に感じているように，一部の研修医も不安に感じていると思われる[13]。また，近年の海外でのトラブルのニュースの影響からか治安に対する不安を述べる研修医もいた。

臨床研修の期間中に外国語学習の機会を与えることは有効だと考えるが，希望する外国語に関する研修プログラムとしては海外研修が最も多かった。海外研修には様々な効果が認められており[14, 15]，現地での外国語使用だけでなく国際的な交流も期待できる。英会話の授業や英語論文の読み方指導を希望する研修医も多かった。これらは時間や人的資源が調整できれば早期に実現できるかもしれない。国際学会に参加することで外国語を勉強したいという研修医もいた。

近年，外国語の習得や国際感覚の育成の重要性が認

識され始めたことから，教育の一環として海外研修を取り入れる大学が増加している[6]。本学では以前，希望する研修医がアメリカ西海岸で1週間研修を行うプログラムを実施していた[16]。研修医は一般家庭にホームステイしながらLos Angeles市内および近郊の3大学で研修を行うほか，複数の開業歯科医院を訪問した。10日間という短期間なので，英語力の向上はあまり期待しにくい。しかし，海外における医療システムの違いについての知識の習得や，外国人患者を担当したいという積極的な姿勢の向上，英会話の練習に対する意欲の向上など，多くのポジティブな効果が認められた[8]。さらに，ホームステイを通して現地の家族と交流したことにより，ポジティブな教育効果が一層高まった可能性がある[17,18]。その後，この海外研修プログラムは諸般の事情で中止になり，現在も再開されていない。研修医対象の海外研修プログラムが再開された場合，参加したいか尋ねたところ，7割近くの研修医が参加したいと回答した。北本は，海外研修を実施する時期は，低年齢時よりも15歳以上が効果的だと報告している[19]。加えて，青年期の海外研修には，異文化，自文化，自我の統合といった人間的成長をうながす教育効果があると述べている。これらのことから今後，研修医を対象とした海外研修の再開も検討する価値があると思われる。

一方，本研究にはいくつかの限界がある。外国人患者の治療経験について質問したが，外国人の国籍，日本在住者なのか旅行者なのかどうかの情報は得られていない。また外国人患者の日本語の会話レベルの調査，さらに研修医の卒業年度，出身大学については調査対象に含まれておらず，その影響を考慮することはできなかった。

本学では数年前から卒前の外国語学習カリキュラムを改変しており，本学における臨床研修プログラムも改訂予定である。今後，さらに収集すべき情報の解析も視野に入れつつ，研修医の外国人患者の治療に対する意識や外国語学習における勉強法について詳細に検討し，より実践的で研修効果の高いプログラムを作成する必要がある。また，本研究は地方大学の限られた数の研修医に対する調査であるため，学会等が主導した多施設連携調査で多くの研修医の意見を把握することも，卒前から卒後へのシームレスな語学学習につなげる上で，有効だと考える。

結　論

今回のアンケート調査により，ほとんどの研修医が何らかの形で外国人患者に関わった経験を持っており，今後も外国人患者と接触する機会が増えると予想していた。また，外国語を学習している研修医が予想よりも少ないことが明らかになった。一方，多くの研修医は国際学会や短期海外研修参加，または観光を目的とした海外渡航を希望していた。さらに，英会話教室への参加や，英語論文の書き方指導を受けることにより，外国語を学習したいと考えていることもわかった。現時点において，研修医の外国語学習量は少ないが，モチベーションは高いという調査結果が得られたことから，今後，研修プログラムを，研修医が卒前から卒後にかけて，継続的に外国語を学べるような内容に改善することが望まれる。

本研究の調査結果は，研修医の外国人患者の治療経験と外国語学習に対する意欲とニーズを明らかにしたものであり，今後の研修プログラム改訂に向けた基礎資料として活用できると考えられる。

本論文の作成にあたり，利益相反事項はありません。

文　献

1）大学のグローバル化に関する閣議決定・提言等. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/036/siryo/attach/1338083.htm（最終アクセス日 2025. 3. 30）.
2）文部科学省．国際交流政策懇談会　最終報告書「我が国がグローバル化時代をたくましく生き抜くことを目指して」 ―国際社会で通用する人材（人財）の育成―. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/kokusai/009/attach/1302363.htm（最終アクセス日 2025. 3. 30）.
3）岡　広子，二川浩樹，谷本幸太郎，加藤功一．広島大学歯学部における日英両言語教育システムの評価．日歯教誌 2018；34：49-54.
4）加藤功一，谷本幸太郎．広島大学歯学部における国際化教育―授業への英語導入を基軸とした多様な取り組み―．日歯教誌 2024；40：20-23.
5）山田和彦，畠山純子，柳　絢子，山本　繁，吉田瑞姫，他．新規開講演習 Global Medical English Ⅱにおける保存修復学教育および学生アンケート結果分析．日本歯科保存学会第160回学術大会抄録集 2024；77.
6）安藤喜代美．国際感覚をもつ実践的教養人育成のための名城大学研修プログラム（2）―国際感覚の育成と課題―．科教研報　2005；19：49-56.
7）米田雅裕，松浦尚志，坂上竜資，岡部幸司，髙橋　裕，他．第1回ブリティッシュコロンビア大学研修旅行の概要およびその教育効果について．福岡歯大誌 2011；37：101-109.
8）米田雅裕，尾崎正雄，内藤　徹，久間一宏，城戸寛史，他．福岡歯科大学臨床研修歯科医海外研修の教育効果について．日歯教誌 2005；21：96-104.
9）木村清子，師岡友紀．日本に在留する外国人の受療行動における課題に関する文献レビュー．武庫川女子大学看護学ジャーナル 2024；9：4-13.
10）大学の世界展開力強化事業「東南アジア医療・歯科医療ネットワークの構築を目指した大学間交流プログラム」英語学習および国際交流に関するアンケート調査．平成26年3月東京医科歯科大学．https://www.tmd.ac.jp/grad/ohp/sekaitenkai/files/enquete_result.pdf（最終アクセス日 2025. 3. 30）.
11）Kanzaki M. TOEIC Listening and Reading test and overall English ability. Jap Ass Lang Teach 2019；11：

559-567.
12）小島奈々恵，内野梯司，磯部典子，高田　純，二本松美里，他．日本人大学生の海外留学に関する意識調査―「内向き志向」と留学意思の関係―．総合保健科学：広島大学保健管理センター研究論文集 2014；30：21-26.
13）加藤法子，鳥越郁代，吉村美奈子，Ian Stuart Gale，芋川　浩，他．本学学生の国際交流に関する意識調査．福岡県立大学看護学研究紀要 2018；15：73-82.
14）岩切美智代．海外語学研修に関する研究（3）―その事前および事後学習の在り方―．鹿児島純心女子短期大学紀要 1993；23：161-173.
15）上野直子．短期海外研修の効果．九州英語教育学会紀要 1988；16：7-16.
16）米田雅裕．臨床研修歯科医海外研修記．平成 16 年度臨床研修歯科医研修発表会症例報告集 2005；78-83.
17）北川歳昭．意識の国際化に関する研究（I）―短大生のホームステイ経験が及ぼす心理的効果―．中国短期大学紀要 1989；23：161-173.
18）二牟礼勉．ホームステイの評価―情意面の測定から―．聖霊女子短期大学紀要 1992；20：46-60.
19）北本晃治．青年期における短期海外研修の意義と可能性．京都外国語大学研究論叢 1990；34：44-55.

著者への連絡先
山田　和彦
〒 814-0193　福岡県福岡市早良区田村 2-15-1
福岡歯科大学総合歯科学講座総合歯科学分野
TEL 092-801-0411　内線 1125，1208
E-mail：legend@fdcnet.ac.jp

Questionnaire survey on the trainee dentists' treatment of foreign patients and their awareness of foreign language studies

Kazuhiko Yamada[1)], Jun Takatori[1)], Shigeru Yamamoto[1)], Junko Hatakeyama[1)], Mizuki Yoshida[1)], Ayako Yanagi[1)], Ayako Ishii[2)], Takashi Tsuzuki[3)], Yoshinori Higuchi[4)] and Masahiro Yoneda[1)]

[1)] Section of General Dentistry, Department of General Dentistry
[2)] Department of Dental Hygiene, Fukuoka College of Health Sciences
[3)] Section of Removable Prosthodontics, Department of Oral Rehabilitation
[4)] Visiting Professor, Fukuoka Dental College

Abstract：The internationalization of education and educational environments has recently become necessary owing to the effects of globalization. At Fukuoka Dental College, we have been working to improve foreign language education for undergraduate students. We also acknowledge the importance of continuous learning after graduation because many trainees will treat foreign patients in the future.

To improve our training program going forward, we conducted an anonymous questionnaire survey to explore how often trainee dentists treat foreign patients and how much effort these dentists apply to studying foreign languages.

Many trainee dentists were involved with foreign patients in some way and also believed that they would treat foreign patients in the future, but few were studying foreign languages. However, many trainee dentists wanted to go overseas to attend international conferences, complete short-term training, and enjoy vacations.

Considering foreign language training, many preferred to complete an overseas training program and wanted to participate in English conversation classes and learn how to write research papers in English.

Following the questionnaire survey, we identified trainee dentists' frequency of treating foreign patients, their attitudes toward studying foreign languages, and willingness to travel overseas. It is important to apply these data in improving dentist-training programs to support trainee dentists' continuous learning using foreign languages before and after graduation.

Key words：questionnaire survey, trainee dentists, treatment of foreign patients, awareness of foreign language studies